SS!!～二次創作じゃないよ～

63171014

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＳ！！～二次創作じゃないよ～

【Ｎコード】
Ｎ９４５１Ｔ

【作者名】
６３１７１０１４

【あらすじ】
ＦＣ２小説さん　と重複投稿
ギターとベースを弾ける少年がバンドに憧れて・・・

新生活

皆さんも経験あるのではなかろうか。

子どもは皆、ヒーローに憧れを抱く。
それが、仮面のヒーローであったり、
怪獣を撃退するウルトラな人であったり、
夜の路地裏でハンドガンを発砲する人であったり、
美少女で戦士な衛星のような名前の持ち主である。

そんな彼（彼女）になりたくて一生懸命、技名を叫んだ覚えがあるはずだ。俺も例外ではなく、悪いヤツらをやっつけたい！と思っていた。

しかし、そんな淡い夢物語は、一瞬で砕け散った。

母さんがビデオを巻き戻し、再生をした。画面に映し出されたのは、暗い空間。音が出ていないと思って、音量を上げた。パッと明るくなったと思うと、一気に、来た。強い衝撃。ただ、乱暴と言える大きな音。筆舌するには、おこがましいくてしょうがないような、ただ、殴られつ続けるような感覚に襲われた。

その中にどこか温かな、少し寂しげな、だけどやっぱり優しいものを感じた。

それが当時幼稚園児の俺と、ＲＯＣＫと呼ばれる音楽との出合いだった。

ＳＳ！！～二次創作じゃないよ～

僕の家族、菘家（すずな）の住人は音楽をこよなく愛している。

と、言ってみたものの、実際には僕と母さんの二人しか今はいない。

いわゆる母子家庭と言うやつだ。
うちの家族構成を聞いて、「大変なのに頑張っているね…」とか言って同情の眼差しを向けるのは、本当に止めてほしい。
虫酸が走る！……とまでは言わないけれど、かなり不快な思いをするのは事実だ。
家族のカタチなんて自分が知っているのが全てじゃないんだぞ、って教えてやりたい。
僕は、今の生活を充分満足しているし、不幸だなんて思ったことなんて一度もないぞ、って。

バンッ！

「コラー！起きろーっ！　肘からのエルボー！」

僕の部屋へノックもなしに入って来た、ウザイくらいなハイテンションガールの名前は……

「どーん！」

彼女の肘が、当たってはいけない位置に直撃する！

「い、痛い～～～～～～！」
「あ、やべ……ずれちゃった。おなか狙ったつもりだったんだけど、ほら！的があったらそこを攻撃したくなるじゃん？それに駄目だと解っていても、どうしてもそれをやりたくなるような。ドッヂボールで相手の顔面にボールを当てたくなるような？
……乙女としては、朝っぱらからテント張っているのはちょっといただけないかな～？はい、これでおあいこ！あんたは、あたしに変なものを見せた、あたしはそれを攻撃した。ギブ　アンド　テイクだよ！」

「意味解んねぇよ！」

僕は立上り、ジャンプする。クソ、マジで痛い。なんで急所に攻撃されると、こんなにも痛むのだろう。なんでこんなにも残念な気持ちになるのだろう。

「ほらほら、早く着替えて！お姉さんが手伝ってあげるから……」

そう言いながら、僕のパジャマのボタンを取り外しに掛かかるのを、右手で制止させる。この一歩間違えたら恥女確定コースまっしぐらな女子、坂乃上小百合（さかのうえさゆり）は、隣りの部屋のお姉さん、ではなく、家が隣りの同級生で、幼馴染みだ。ちなみに、お姉さんと言っているけど、誕生日は僕の方が早い。気分だけ、歳上なのだ。

「あぁ、あなたの毎晩の彼女があたしの顔に……ハァハァ」

「止めろ！興奮すんな、この　変態！」

「そんな、変態だなんて……キャッ！」

こいつ、もう駄目かもしれない。

「着替えるから、出て行け！」

僕は、小百合の背中を押すと、

「あっ、優しくしてね……」

頬が赤く染まり、上目使いなのは正直可愛いいね。

「するか、馬鹿！」

一瞬艶めかしい、色っぽい声を出した変態を、部屋から追い出して、鍵を締める。

「あなたとあたしの愛は、こんな薄っぺらい扉には邪魔出来ない……！」

なんか、若干格好良いセリフを言っているけど……『ガチャリ』と、鍵が開いた。

「Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ！！」

とか叫びながら抱きついてきた。俺はバランスを崩し、ベットへ倒れ込む。上半身裸の俺に頬をすり寄せてくる。朝の時間はとても貴重なのに……

学校にて

□

「ほらー、中学に入学してから二週間もたったんだよ！部活なにに入るか決めた？

いや、タッタだなんて。涼夏のエッチ（＊ノ∀ノ）イヤン」

ちなみに、涼夏っていうのは僕の名前。

「うーん、部活かー。軽音楽部があったみたいなんだけどなんか2、3年前、廃部になっちゃったんだって……茶道部にでも入ろうかな……？」

だだだだだだ！がしっ！

「軽音部に入るのか！？」

と言いながら、僕に後ろから抱きつくような状態で部活勧誘をしてきやがっているのは、一応、小さいながらも……『小さな小さな』ふくらみがあるようなので、女子だろう。声でも解るけどね。うるさいくらいキンキン響く声だ。

「え、なにこのチビジャリ。涼夏、知合い？」

なんか急に冷めた声になる小百合！

「知らないよ！こんな小さな女の子。僕はそっちの趣味はないつもりだし、実際にもない！だから小さなこの子ことは知らない。故に僕は悪くないし、犯罪も起こしていない！」

「うわ～、なにこの人　熱くなっちゃってるの……まじ気持ち悪いんですけど。
え～っと、ぼくはなんさいですかー？お母さんとはぐれちゃたのー？お姉さんが一緒にいてあげるねー」
どっちの方が気持ち悪いんだよ、急にお姉さんぶったりしちゃってさ。頑張って背伸びしたところで、小百合は小百合のままなのにね。
「どっちの方が気持ち悪いんだよ、急にお姉さんぶったりしちゃってさ。頑張って背伸びしたところで、小百合は小百合のままなのにね」
どすん！
「僕の足の小指が！焼けるように痛いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！」
こ、この女、躊躇なく僕の足を破壊しようとしたぞ……！
「僕がなにしたっていうんだ！なにもしていないだろう！」
「今の心の声、全部口からもれていたよ……！」
「それはそれ、これはこれだよ。そんなことでいちいちイライラするなんて、カルシウム足りてねぇーんじゃねぇのか？おっぱい大きくなんねぇぞ」
「おっ、おっぱ……！うるさいなぁアホ、これでも大きくなっとるんや！確認してみぃ、ほら、お姉さんの実力見せたるわ！後で後悔しなさんなや！」
でた！小百合が興奮した時に見られる『エセ関西弁』。これが見られるということは、いつもの自滅するパターンだ。

「では、その実力とやらを試させてもらおうか？」
「ええよ～、試してみ～。ほらさっさとせんか！泣いても許してやんねぇかんな！」

仁王立ちのようにして、堂々と胸を張る小百合。なんで、こうもどうどうと男子におっぱいを触らせようとする女子がいるのだろう？やっぱり恥女なのか、こいつは恥女なのか？

「こらー！時雨ををむしするなぁー！！」
「「あぁ、忘れていた」」

見事なシンクロをみせる。

「うぅ、無視するだけでなく、忘れていただなんて……ひどい。時雨は、友達が欲しいだけのに……」

友達が欲しい？ともだちがほしい？トモダチガホシイ？こいつは、一体、なにを言っているのだ。友達なんてもの、本当に欲しいと思っているのだろうか。

いやいや待て待て、必ずしもこの時雨とか言う幼女と、僕の世界が、似ているとも限らない。もしかしたら僕のとは別パターンのヒドイ過去を背負っているのかもしれない。そうだよな、外見だけでその人の全てを知ることなんて、出来るほずがない。

と、戯言にすぎない独り言をしていると、小百合は、

「なんだ、おまえ友達がいないのか？可哀想に。制服のコスプレというものは、たいがい歳上が無理して着るものばかりだと思っていたが、そうでもないらしいな。」

なんて、どうでもいいことに対して本気で感心しているようで、

諸手を胸の前で組んでいる。すると、二つのやわらかそうな特大ジャンボプリンが、これでもか！！ってほど強調されている。……服の上からではあまり気付かなかったけど、小百合、おっぱいデケーな。

それに比べて僕の背中に当たっているのは、せいぜいマシュマロがいいところだろう。まぁ、やわらかいってことは◎だけどね。

「時雨は幼女じゃないー！！それにコスプレでもなーい！！お前らと同じ一年生だー！！ほら！新入生代表の挨拶をしていただろ！！時雨、頭良いんだぞ！！」

「おいおい、寝言は寝てから言えよ。新入生挨拶と言えば、校長とかが話す時に使う『あの台』に隠れてしまった、小学生の記憶しかないのだが？っていつまで涼夏にくっついているつもりだ！とっとと離れろ」

そう言いながら、小百合は追いはぎのごとく容赦なしに引き剥しにかかる。まぁ、若干当たっている、温かいふくらみがあるので、時雨とかいう幼女、頑張れ！

「嫌だー！！お兄ちゃんと一緒にいるー！！」

「「お兄ちゃん？」」

待て待て待て、一瞬どきっとしてしまったのはなんでだ？確かに声を訊くぶんには、決して悪くない。むしろ可愛らしい声だ。けど、相手は小学生だぞ？いいのか僕？

「そうか、そうか。涼夏は妹系が好きだったんだな。通りで『ちょっぴりエッチなあいつはおさななじみ』は効果がないわけだ。うん、あたしもこれからは妹系で攻めてみるか」

「ま、待ってよ！僕はシスコンじゃないよ！！それに、抱きつかれ

ている方にとっては、迷惑なんだよ！」

刹那、時雨とか言う小学生（仮）の腕に力が入り、抜ける。まるで別れを惜しむような。まるで僕の体温を感じとるような。まるでもう会うことの出来ない恋人のような。

「じゃあ、涼夏はこの『妹系幼女』のことが嫌いなんだな。ほらさっさと離れろ！」小百合はオジャマムシを追い払うように、僕と、時雨を引き剥す。まだもう少し、彼女のぬくもりを感じていたかった。

振り返ると、そこには赤いランドセルと黄色のボウシがとても似合いそうな背の低い女子が、この世の終わりを告げられた人のように、深い絶望に染まった色の瞳をしていた。

一体、なにが彼女を追いつめているのだろう？

一体、どこで彼女は失敗してしまったのだろう？

一体、どうやったら彼女は笑ってくれるのだろう？

出会い

彼女は今にも心のダムが決壊して溢れそうになっていた。きっと、色々なものがせきとめられていたのだろう。この小さな体にはいくつもの感情がよどんでいて、うずまいていて、まざりあっていて、せめぎあっていて、ぼうちょうしていて、あふれそうでいて、はちきれそうでいて、それでいてがまんしていた。そんな危うい状態で均衡がとれていたのだろう。　今、僕がもし彼女の背中を押すとしたら一生崩れ落ちたものになるか、ずっと笑っていられるかのどちらかだろう。

「っつう！」

彼女は後ろを向き、走りだそうとする。ここで別れたら、もう二度と会えない気がした。いや、その通りだろう。絶対に今までの彼女に会うことは出来ない。会ったとしても、もうとりかえしのつかない状態だろう。

そんなの、絶対に、嫌だ！！！！

「待て！！」

僕は何時の間にか、彼女の手を握っていた。細い手は力を加えると簡単に折れてしまいそうで、少し冷えていて、震えていた。

「いいの！！時雨は、時雨は一人でも大丈夫だから！！離して！！」
「離さないよ」
「いいから離してよ！！もういいの！！どうでもいいんだから！！」
「そう言うなよ」
「離せーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

「大丈夫だよ」

僕は、そっと、彼女を……時雨を抱き寄せた。

出会い（後書き）

谷川俊太郎さんの「春に」を引用させていただきましたm（＿＿）m

ども、お久しぶりです

暗くなってきたのでその後解散をした。
家に帰ってからお風呂の中で今日1日あったことを思い返してみた。時雨パパ（四季さんという名前らしい）は僕のお父さんのことをほんの少しだけ話してくれた。

「父さんの名前を教えてもらうの忘れてた」

なんとも情けない話だが、今になってから夜眠れなくなるのではないかと思えるくらい気になり始めた。それと同時に三音にあったギターのことを思い出した。
あの傷だらけのギターに触った時、すごい情報の奔流が起こった。僕に似ている人が同じギターを抱えていて僕に似ている声で歌っていて……なにからなにまで僕に似ていたあの人は一体誰なのだろう。

だけど、なにより僕とは壊滅的に違うところがあった。瞳に宿る輝きが全然似ていなかった。似るもなにも、全くの別種だった。存在するものと存在しえないのを比較するのと同じくらいの無意味さだった。
あの人には核融合によって爛々《らんらん》と燦々《さんさん》と光や熱を放つ、真夏の太陽が両眼に充填されているのに、僕は。

お風呂から上がり体の水気をきってからギターをケースから取り出した。
当然クラシックの方である。
お母さんが元々、というより現在進行形でそうなのだが、弦楽器の天才である。どう天才なのかというと音を奏でるために作られた楽器ならなんでも何十年間も練習してきたような熟練者のような技

術を発揮出来る、というものだ。もはやチートである。
オーケストラなどの楽団はもちろんのこと。現在は国外で活動しているため家に帰ってくることはない。

「顔を会わせなくて済んでラッキーなんだけどね」

絶賛一人暮らし……独り暮らしを満喫しながらも学校に通うようにしている。中学生になったらなにかがかわれる、そんなことを思っていたけれど皆無だった。強い言うのであれば子供料金ではなくなった、それぐらいである。

「おまえは相変わらずきれいだな」

僕のギター、ヨーロッパから取り寄せた数百万円するギターらしい。名前はまだない。それにしても母さん、どれだけお金もちなのですか……
そっと愛でるように撫でてみるけど『声』はきこえない。

親指をそっと動かす。

♪〜

僕は小さい頃からこの音を聴きながら育ってきた。
僕は小さい頃からこの音以外を聞いた憶えがない。

学校に登校したとしても午後には家に帰り練習。
暇さえあれば練習。時間さえあれば練習。
ずっと僕と一緒に過ごしてきたギター。僕のギター。

でも。

僕はダメだった。お母さんと同じにはなれなかった。

朝（前書き）

なんか面白くないですね
すみません

朝

ピピッピピッピピッピピッ

最も普遍的なデジタル時計の電子音で代わり映えのないはずの今日も目覚めた。

歯を磨くため洗面所のドアを開けた。

「あっれ～朝、早……」　バタンッ！

即座にドアを閉めた。なにかが僕の視界に入った気がしたけれども、それを認めてしまったらなんだか良くないことになること間違いなく、ｒｏｌｌｉｎｇ　ｓｔｏｎｅｓのように坂道を転げ落ちるように残念なことになりかねない。むしろ、シマウマのようなツートンカラーの車に乗っている人達のお世話になるところだ。

ききおぼえのある声は気のせいだと願いたい……！

そう悶々と悩みに悩みぬいているのにも関わらず、

ガチャ

「なんで閉めるのさ～」

「服を着ろぉお！！」

悩みの元凶が顔を出した。

「ち、ちょっと～お姉さんの顔を見るなり泣きだすなんて、寂しかった？」僕の言葉は堂々と無視ですか。

上目使いに尋ねられても全然全く悉く違いますから。

にじりよるようにして小百合は僕に近づいてくる。手をワキワキ

と怪しく動かしているので、ぜひとも直ちに逃げだしたい。

「もうっ！涼夏ったら照れなくてもいいのにさっ、むふふふふふ」

明らかにおかしい、笑い方が絶対におかしい！

「それ～っ！」

掛け声と同時に飛びかかってきた。なす術もなくつかまえられる僕。

「あぁ、涼夏のほっぺたってなんでこんなにやわらかいんだろう？もう食べてしまいたいなぁ～」

僕は必死に抵抗をしてみせるが、全く意味をなさず。といっても両腕をぶんぶんと振り回すことしかしてないけど……

……。

「で、なんで小百合が僕の家の中にいるわけ？不法侵入でお巡りさんにわんちゃんプレイでもさせられたいのかな？」

ひとしきり僕のほっぺたをこねくりまわし十分に満喫した小百合の肌なんだかさっきよりもつやつやしているように見えた。人の許可なくほっぺたとか触んじゃねぇよ。別に嫌ってわけじゃないけど。

「なんでってぇ～鍵を開けたんだよ～」

「なんで僕の家の鍵を持ってるわけ？」

「そ・れ・は！女は鍵穴であって、それを無理矢理開けるのも優しく開くのも男の技量しだいってこと～」

「誰が下ネタの話をしろと言った！ていうかそれ、全然答えになってないから！その方式でいくなら僕が『鍵』で小百合の方が『鍵穴』だろ！？」

「やだ、小百合が『穴』だなんて……」

「そんなこと一言も言ってないから！」

なんでこうも会話にならないのだろう。

「そんな涼夏！強引に開けようとしないで、いやっダメ～～～！」

「僕はなにもしていないよね！なんにもしていません！勝手に身悶えないで！」

とにもかくにも、話は進展しない。

学校（前書き）

ありがとうございます！

なんか鬱ですね

学校

どうせ、ね。いいんだよ。僕がバカにされてるだけだし。

「涼夏ぁ！入部届書いた～？」

廊下に出たところで小百合から声を掛けられた。クラスの人達なんか無視して普通に小百合は話しかけてくれる。僕の過去なんて全く意に介さないような感じで。それはそれは嬉しいけどね。でも。

「入部届って……（部活は）なにするの？」

「ナニするって、こんな真っ昼間から……」

両手を赤らむ頬に当てながらくねくねと身体を動かしている様は、ちょっと以上に傍にいてほしくないランキングＮｏ．１を見事にかっさらいそうだ。

「……」　ジト目で応戦すると、

「いいよ～もっと、ぁっ、もっと～！」

今度はぶるぶると身悶えながら恍惚の表情を浮かべていた。むう、なんと言いますかエロいな。

取りあえず気にしないことにして手を洗って教室に戻った。

……

で、放課後になった。適当にかばんの中へ教科書を突っ込み帰ろうとすると、教室から出たところで時雨にばったりと会った。

「あ！」
「……」
視線を逸らして、気付かなかったことにして、帰ることにした。
「待て～！お兄ちゃんはなんで逃げるんだよ～。
今日もくるんだろ？三音くるよな？なら一緒に行こ～！」
そう言うなりすぐさま僕の手をとり引っ張るようにして連れていかれた。
「……」
また来てしまった。もうギターを触らないと決めていたはずなのに。
失敗したことを取り戻すことなんて出来やしないのに。
「おっ、ボウズ。また来たんだな。うんうん、いいんじゃないか？」
「……」
昨日のことを思い出してしまう。あんなに楽しい時間をまた体験したいと、経験したいと。
でも、ダメなんだよ。あれは一瞬の気の迷い。ほんの出来心。
二度目は、ない。
「ん～？そんな暗い顔なんかしなさんな。
ほらボウズ、昨日弾いてたやつ、弦、張り替えておいたぞ。
前の弦もう何年も取り替えてなかったからサビサビになってぞ。感謝するこったな。

あぁ、あと手入れ道具も一通り揃えておいたから持ち帰って練習してもいいぞ」

四季さんは僕に、早速弾いてくれ、って感じで促してきている。

そんなにも親切にしてくれないでくれ。

僕は。

メール

時にしておよそ１６時間前、携帯にメールが届いた。

宛先

『母さん』

件名

『涼夏へ』

本文

『中学校に入学して、そろそろ2週間が経過すると思います。
新しい環境にはもう慣れましたか？
友達はたくさん出来ましたか？
体調は崩していませんか？
怪我したりしていませんか？
勉強は難しいですか？
話したいことが沢山あります。
聞きたいことが山程あります。
話してほしいことが沢山あります。
聞いてほしいことが山程あります。
今、
涼夏がなにを思ってどう感じていかに思考しているのかは残念ながら分かりません。
だけど何時如何なる場合でも私はあなたの母親です。
なにがあっても、あなたを必ず護ります。
先の事件の所為で少し居心地が悪いかもしれませんが、
あなたには全く非はありません。
そこは胸を張っても大丈夫なのですが、

なかなか難しいでしょう。
でも気にすることはありません。
いずれ時が解決してくれます。
無責任かもしれませんが、
熱を持っているうちはいくら頑張ってみても焼け石に水なのです。
まわりの人間はただただ面白がっているだけなのです。
気にする必要はありません。もういちど言います。
気にする必要はありません。
あなたは、あなたですから。

私はあなたに色々と求め過ぎていたかもしれません。
なにかの偶然、運命の悪戯かもしれないので、
これを機に新しいなにかに挑戦するもよし、
このまま音楽を続けるもよしです。
涼夏、あなたが決めなさい。
私はあなたの味方です。

P．S．小百合ちゃんとはどうなのかな？』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9451t/

SS!!～二次創作じゃないよ～

2011年12月29日11時46分発行